



世界文化遺産登録に向けて

佐渡の金銀山史を彩る人々

○鎮目市左衛門 (1564~1627)

名を惟明（元あき）といい、元和4年（1618）〜寛永4年（1627）まで佐渡奉行を勤めました。先祖は甲斐国山梨郡鎮目村（現在の山梨県笛吹市）の出身で、父は武田信玄、勝頼2代に仕え、武田家滅亡後は徳川氏に仕えたといわれています。惟明は父の後を継ぎ、関ヶ原の役では徳川秀忠の軍に属して出陣し、信州真田の上田城攻めでは七本槍の一人として活躍しました。



▲下相川吹上浦にある鎮目市左衛門墓

鎮目奉行は寛永4年7月14日、佐渡にて64歳で死亡し、下相川吹上浦（ふさあべうら）に葬られました。現在の墓は弘化2年（1845）に建てられたもので、昭和33年（1958）、新潟県の史跡に指定されています。

○竹村九郎右衛門（生年不詳~1631）

名を嘉政（よしまさ）といい、元和4年（1618）〜寛永4年（1627）までは鎮目奉行と共に、鎮目奉行亡き後は寛永8年（1631）まで一人で佐渡奉行を勤めました。大和国竹内村（現在の奈良県葛城市）の出身で、大久保長安の家臣であったといえます。また、熱心な浄土宗信者で、相川二丁目に広源寺を建て、



▲小木光善寺にある竹村奉行の供養塔



▲長谷寺にある竹村奉行の五輪塔



▲佐渡一国通用印銀（一分銀）中央に「徳」の文字がみえる



▲佐渡小判裏面右上に「佐」の文字がみえる

長坂町にあった光善寺を小木に移したことが知られています。

竹村奉行は寛永8年9月15日、江戸で亡くなり、新宿区牛込にある大信寺に葬られました。佐渡で亡くなり、小木光善寺に葬られたとする説もあります。

○鎮目・竹村両奉行の時代

元和から寛永初期にかけての鎮目・竹村両奉行支配の10年間は、金銀山史上の最盛期とうたわれています。鎮目奉行はまず、大久保長安の建てた陣屋が豪華すぎるとして規模の縮小を行いました。また、相川の人々に対する市価の2割安での米の販売や、奉行所内に後藤役所を設けて佐渡小判の鑄造、佐渡一國で通用する極印銀の発行などを行ない、経済流通の安定を図りました。山師に対しても、鉾山経営の資金や資材の貸付、御直山（おしきやま）（幕府直営の鉾



▲竹村奉行が整備した小木港

山）の建て直した産金政策を積極的に行了ました。一方竹村奉行も、各番所での徴税や港湾整備などを推進し、廻

佐渡在住が多かった鎮目奉行は、山師の救済策や民政の安定を講じたことから、庶民から「鎮目さん」と称され、長らく相川の人たちに慕われてきました。起源は不明ですが、毎年旧暦の4月14日を鎮目祭として人々が集まって、墓前に花や線香を供えるという行事が行われていたそうです。竹村奉行も港に寄港する廻船や、相川から小木まで金銀を運ぶ小早船（こばねぶね）の建造に尽力したことから、船材の産出地小倉に近い長谷寺には、供養のための巨大な五輪塔が現在も残されています。

◆教育委員会 世界遺産・文化振興課

☎ 27-4170